

(潜水業務)

- 問 1 気体の物理的性質に関し、次のうち誤っているものはどれか。
- (1) 気体と液体が接しているとき、温度が一定であれば、液体に溶け込むことのできる気体の量は、気体の圧力に比例する。
 - (2) 気体は、高い圧力下では密度が高くなるので、異なる気体を容易に混合することができる。
 - (3) 混合比の異なる混合気体が薄い透過膜を境として接するときは、双方が平衡となるまで過剰な分圧のガスの拡散浸透が行われる。
 - (4) 気体の体積は、同一圧力のもとでは温度が上昇すると増加し、温度が下がると減少する。
 - (5) 温度が一定の場合、気体の圧力が高くなると、それに反比例して気体の体積は減少する。

- 問 3 潜水方法に関し、次のうち誤っているものはどれか。
- (1) 空気潜水とは、通常のを呼吸する潜水で、一般の潜水は空気潜水である。
 - (2) 潜水者への送気方法により、送気式潜水と自給気式潜水に大別される。
 - (3) 送気式潜水は、ホース式潜水ともいわれ、水中で呼吸ガスの確保の心配がないので、長時間の潜水作業に適している。
 - (4) 送気式潜水には、定量送気式と応需送気式がある。
 - (5) ヘリウムと酸素の混合ガスを使用する潜水では、潜水時間の長短にかかわらず、空気潜水に比べ減圧時間が短くてすむ。

- 問 2 気体の化学的性質に関し、次のうち誤っているものはどれか。
- (1) 酸素は、体内に取り入れられると他の物質と化学的に反応し、この際放出されるエネルギーが生命を支える原動力となる。
 - (2) 窒素は、化学的に安定した気体であり、不活性ガスの一種である。
 - (3) ヘリウムは、他の元素と化合しやすい気体で、質量が極めて小さいため呼吸抵抗は少ない。
 - (4) 一酸化炭素は、有毒な気体であって、物質の不完全燃焼などによって生ずる。
 - (5) 空気は、酸素、窒素、アルゴン、二酸化炭素等の混合気体である。

- 問 4 水中における音や色の変化等に関し、次のうち正しいものはどれか。
- (1) 音は、水中では空気中よりもはるかに速く伝わり、また、長い距離を伝ばするので両耳効果が高くなる。
 - (2) 水中では、物が青のフィルターを通したときのように見えるが、これは青色が水に最も吸収されやすいからである。
 - (3) 水中に入った太陽光線は次第に吸収され、透明度の高い水中でも、水深 10 m では照度は約半分に減少する。
 - (4) 光は、空気と水の境界において一定の入射角以内では屈折し、顔マスクを通して水中の物体を見ると、実際の位置より近く見える。
 - (5) 濁った水中で、よく見える色は蛍光性のオレンジで、次いで黄色、白色の順である。

問 5 フーカー式潜水に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 空気圧縮機は、潜水する水深の圧力下で毎分40以上送気する能力を有するものを用いる。
- (2) 空気圧縮機による送気圧力が1 MPa未満である場合も多く、このときは圧力調整器のセカンドステージが単独で使用される。
- (3) 作業船上などで送気している空気の色を確認するため、必ず流量計を設ける。
- (4) 船上に予備空気槽を設けず、小型のポンペを携行して、潜水することがある。
- (5) フーカー式潜水用のドライスーツは、ブーツと一体となっている。

問 6 ヘルメット式潜水器による吹き上げ事故の予防措置として、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 潜水深度を変える場合は、必ず船上に連絡する。
- (2) 浮力が高めになったら、排気弁は操作しないで、腰バルブで送気量を絞る。
- (3) 身体を横にする姿勢をとるときは、潜水服を必要以上に膨らませない。
- (4) 潜降・浮上時には、必ずさがり綱（潜降索）を使用する。
- (5) ウェイトは、浮力の変化を十分に考慮して選ぶ。

問 7 潜水業務に必要な器具に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 信号索は、「いのち綱」の役目も果たすので、水中電話があっても、万一の事故に備えて用意しておくことが望ましい。
- (2) 水深計は、指針が2本付いていて、1本は現在の水深、他の1本は潜水中の最大深度を表示する方式のものが便利である。
- (3) さがり綱（潜降索）は、丈夫なマニラ麻製で太さ1～2 cm程度のものを使用し、水深を示す目印として5 mごとにマークを付ける。
- (4) スクーバ式潜水器の救命胴衣は、液化二酸化炭素（液化炭酸ガス）又は空気ポンペを備え、引金を引くと救命胴衣が膨張するようになっている。
- (5) スクーバ式潜水では、1 kg、3 kg、5 kgなどのウェイトが使用されるが、ヘルメット式潜水のウェイトは、一組約30 kgもある。

問 8 潜水業務の危険性に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 潜水作業では、圧縮空気を呼吸することにより減圧症や窒素酔いになる危険がある。
- (2) 寒冷地では、高圧ボンベから供給される空気が急速に膨張すると温度が下がり、レギュレーター等が凍結して給気不能に陥る危険がある。
- (3) 水中での溶接・溶断作業では、ガス爆発の危険はないが、感電する危険がある。
- (4) 海中の生物については、みずたこ、うつぼ等によるかみ傷、ふじつぼ等による切り傷のほか、いもがい類やがんがぜ等による刺し傷を負う危険がある。
- (5) サメが出没する海域では、漁獲物を身体に付けた状態はサメの攻撃を受ける危険がある。

問 9 水中拘束の予防に関し、次のうち誤っているものはどれか。

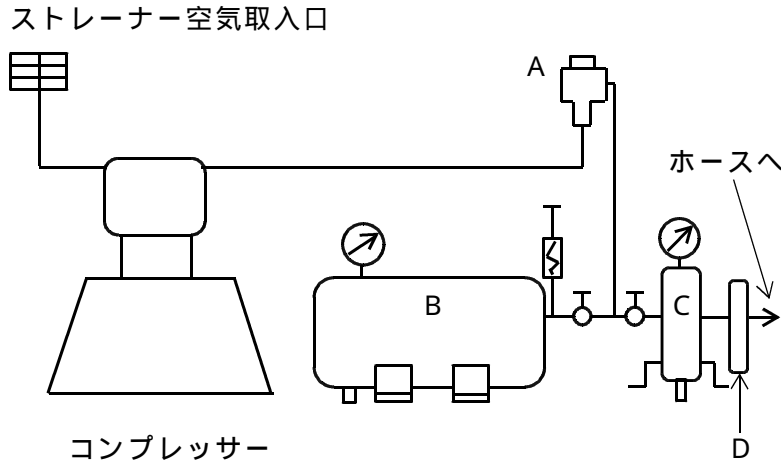
- (1) 障害物を通過するときは、その経路を覚えておき帰りも同じ経路を通るようにする。
- (2) 洞窟等の狭い場所に入るときは、ガイドロープを使用する。
- (3) 使用済みのロープ類は放置しないで船上に回収する。
- (4) 送気式潜水業務において障害物を通過するときは、その下をくぐり抜けず、必ずその周囲をまわるようにする。
- (5) スクーバ式潜水では、2人1組で作業を行う。

問 10 潜水作業時における溺れおぼれに関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 溺れは、気道や肺に水が入ってしまったため呼吸ができなくなるものであり、水が鼻に入ったとき反射的に呼吸が止まってしまうことはない。
- (2) 作業船のスクリューに、送気ホースが巻き込まれて溺れが起きることがある。
- (3) スクーバ式潜水の場合は、窒素酔いにより正常な判断ができなくなり、溺れることがある。
- (4) 溺水者を救急処置する場合、肺に入った水を吐き出させるのは難しいので、無理に吐き出させることはしないで、人工呼吸や心マッサージを行う。
- (5) スクーバ式潜水で溺れを予防するには、救命胴衣又は浮力調整具を必ず着用する。

(送気、潜降及び浮上)

問 1 1 空気圧縮機を使用した潜水業務の送気系統を示す下図において、A から D の機器の名称として正しい組合せは(1)～(5)のうちどれか。



	A	B	C	D
(1)	空気清浄器	予備空気槽	調節用空気槽	逆止弁
(2)	逆止弁	予備空気槽	調節用空気槽	空気清浄器
(3)	安全弁	調節用空気槽	予備空気槽	空気清浄器
(4)	逆止弁	空気清浄器	調節用空気槽	予備空気槽
(5)	空気清浄器	調節用空気槽	予備空気槽	逆止弁

問 1 2 送気式潜水器の空気槽に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 送気開始前には、必ずドレーンコックを開放して、空気槽内にたまった凝結水や機械油などを圧縮空気と一緒に排出する。
- (2) 潜水終了後は、空気槽内に残った圧縮空気をドレーンコックから抜いておく。
- (3) 予備空気槽には、送気開始前に調節用空気槽から潜水者に送気する最高の圧力と等しくなるまで、空気を充填する。
- (4) 予備空気槽の圧力が規定の圧力よりも低下しないよう、常に空気漏れに留意する。
- (5) 規定容積の予備空気槽には、最高潜水深度で数分程度の呼吸量に相当する空気量が貯蔵されているに過ぎない。

問 1 3 送気設備に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 流量計には、特定の送気圧力による流量を示す目盛が目盛られており、その圧力以外で送気するには換算を示す目盛が必要である。
- (2) 流量計は、調節用空気槽とコンプレッサーと之间に取り付けて、潜水者に送られる空気量を測る計器である。
- (3) 圧力計については、作動状況、圧力指示の精度などを点検する必要がある。
- (4) 空気清浄装置は、清浄材としてフェルトや活性炭が使用され、臭気や水分、油分を除去する。
- (5) 流量計については、本体のキズ・破損等の異常の有無、目盛り板内への油の汚染状況、作動状況について点検する。

問 1 4 スクーバ式潜水に用いられるポンペ、圧力調整器(レギュレーター)等に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) ポンペには、クロムモリブデン鋼などの鋼合金で製造されたスチールポンペと、アルミ合金で製造されたアルミポンペがある。
- (2) 残圧計の内部には高圧がかかっているため、ゲージの針は顔を近づけないで斜めに見るようにする。
- (3) ポンペは、一般に、内容積が4～18で、圧力が15～20MPaの空気が充填されている。
- (4) ポンペに使用するバルブには、開閉機能だけのJバルブと、開閉機能とリザーブバルブ機構が一体となったKバルブがある。
- (5) ポンペへの圧力調整器の取付けは、第1段減圧部のヨークをポンペのバルブ上部にはめ込んで、ヨークスクリューで固定する。

問 1 5 スクーバ式潜水を行う場合の留意事項として、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 新品のマスクには、前面ガラスにパラフィンが塗られているので、使用前に石けんなどで洗い落とす。
- (2) マスクは、目と前面ガラスまでの間隔が小さく、また、マスク内の容積が大きくないものを選ぶようにする。
- (3) ポンペの空気量は、初心者の場合には水中作業に不慣れなため呼吸量が多くなるので、同じ潜水でも熟練者の約2倍の空気を確保できるようにする。
- (4) BCにより浮上するときは、いつでもBCの給気ボタンが押せる状態で、顔を上に向けて浮上する。
- (5) レギュレーターは使用後、真水でよく洗い日陰で乾かす。

問 16 ヘルメット式潜水に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) ヘルメットに設けられた排気弁は、潜水服内の余剰空気や潜水者の呼気を排出し、浮力調節に用いる。
- (2) 排気弁は、潜水者自身が頭で押して操作するほか手を使って外部から調節することもできる。
- (3) ヘルメットに設けられたドレーンコックは、そのレバーを開閉することによって、送気中の水分や油分をヘルメットの外へ排出する。
- (4) ヘルメットの送気ホース取付口の中には逆止弁が組み込まれていて、送気の逆流を防いでいる。
- (5) 腰部をベルトで締め付け、ヘルメットや潜水服内の空気が下半身に入り込まないようにする。

問 18 緊急時の浮上と事後処置に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 緊急浮上時には、なるべく高気圧作業安全衛生規則別表第 2 (潜水業務用時間表) による第 1 回の浮上停止を行い、その後は浮上停止を行わないで、法定の速度で水面まで浮上する。
- (2) 特に緊急を要し、途中で浮上停止を行う余裕がない場合でも、できるだけゆっくり浮上する。
- (3) 浮上後、できるだけ早く、また体を動かさないようにして再圧室に入る。
- (4) 再圧室による加圧は、緊急浮上後 3 分以内に開始するようにする。
- (5) 再圧室に入ったら、直ちに第一回目の浮上停止の水深に相当する圧力まで加圧し、その後潜水業務用時間表に従った減圧をする。

問 19 1 日 2 回の潜水業務を 1 回目 24 m、2 回目 25 m の深度で行うこととし、1 回目の潜水時間を 90 分とした場合、2 回目の潜水可能時間は次のうちどれか。(本問及び問 20 では、業務間ガス圧減少時間等について、別表 A 及び B を用いて算出すること。)

- (1) 90 分
- (2) 98 分
- (3) 110 分
- (4) 114 分
- (5) 126 分

問 17 潜水業務に必要な器具に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) スクーバ式潜水用のウエットスーツは、スーツと素肌の上に水が入り込むので、できるだけ体型にあったものを使用する。
- (2) マスク式潜水では、通常、潜水服と一体になった潜水靴を使用するが、ウエットスーツを使用する場合は、別に潜水靴を用意する必要がある。
- (3) フーカー式潜水で使用する潜水服は、ドライスーツであり、ウエットスーツは使用できない。
- (4) ヘルメット式潜水器の場合、水中電話は、ヘルメット内に送受信器を取り付け、船上と通話する。
- (5) レギュレーターのカバーの部分に耳を近づけると、継続的にシューシューと音がするとき、低圧弁の故障が考えられる。

問 20 前 19 問に関して、2 回目の作業を限度一ぱい行った場合の浮上停止の水深と停止しなければならない最少の時間は次のうちどれか。

- (1) 水深 6 m で 21 分、水深 3 m で 22 分
- (2) 水深 6 m で 26 分、水深 3 m で 22 分
- (3) 水深 6 m で 27 分、水深 3 m で 25 分
- (4) 水深 6 m で 27 分、水深 3 m で 32 分
- (5) 水深 6 m で 29 分、水深 3 m で 41 分

(午前終了)

受験番号

潜水 B

1 / 4

(高気圧障害)

問 1 人体の呼吸器系に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 呼吸とは、空気中に含まれる酸素を体内に取り入れ、体内で生じた二酸化炭素を体外へ排出することである。
- (2) 呼吸は、肺呼吸（外呼吸）と組織呼吸（内呼吸）の2つの段階によって行われる。
- (3) 肺胞の表面積は、左右の両肺を合わせると約70m²あるといわれている。
- (4) 気道は、鼻腔、口腔、咽頭、喉頭、気管などから成り、ガス交換の機能をもっている。
- (5) 呼吸死腔とは、換気のうち肺でのガス交換に関与せず、気道やマスクに残る分をいう。

問 2 人体の循環器系に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 循環器系は、心臓、動脈系、静脈系、毛細管系の血液循環系とリンパ管系から成る。
- (2) 心臓の左右の心房の間に心房中隔があり、完全に隔てられているが、人によっては卵円孔開存など両者間に通じている場合がある。
- (3) 心臓に卵円孔開存があれば、減圧時に生じた静脈性の気泡が孔を通じて動脈側に流れ、重い減圧症を引き起こすおそれがある。
- (4) 心臓は、自律神経である交感神経及び副交感神経の支配を受けており、交感神経は心臓の働きを促進し、副交感神経は抑制する。
- (5) 心臓が血液を送り出すときを拡張期、心房から心室へ血液が流れ込むときを収縮期といい、この2つを合わせて心臓の1周期という。

問 3 人体の神経系に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 中枢神経は、脳と脊髄から成っている。
- (2) 脊髄は、運動系と知覚系の神経の伝導路である。
- (3) 末梢神経は、体性神経と自律神経から成っている。
- (4) 自律神経は、随意筋に分布し、生命の維持に必要な呼吸などの作用を調節する。
- (5) 延髄にある呼吸中枢が呼吸の調節を行う上で、特に血液中の二酸化炭素が重要な役割を果たしている。

問 4 副鼻腔の障害等に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) かぜを引いて鼻から副鼻腔に炎症を起こし、鼻腔と副鼻腔を結ぶ細い管がふさがったまま潜水すると障害を起こすことがある。
- (2) 障害を予防するためには、初期の潜降をゆっくり行う。
- (3) 鼻腔と副鼻腔との間の細い管がふさがった場合は、耳抜きによって開くことができる。
- (4) 症状は、障害を起こした副鼻腔部分に強い痛みや出血が起こり、特に眉間に激痛が生ずることがある。
- (5) 症状が現れたときは、同じ水深の場所に暫くいると痛みが和らぐことが多い。

問 5 窒素酔いに関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 水深30～40m以上になると、潜水者が酒に酔ったような状態になる。
- (2) 窒素酔いは、吸気中の窒素分圧が高くなると、麻酔作用が出現することによって起る。
- (3) 窒素酔いは、初めはほろ酔い程度でも、深く潜るにつれて酔いがひどくなる。
- (4) 窒素酔いがひどくなると、筋道を立てて考えることができなくなり、ついには意識を失い、溺れの原因となることがある。
- (5) 訓練によっても窒素酔いに慣れることはできないので、窒素酔いにかかりやすい人は深い潜水は行わないようにする。

問 6 二酸化炭素中毒に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 吸気中の二酸化炭素分圧が上昇すると、呼吸が浅くなり呼吸の回数は増加する。
- (2) 吸気中の二酸化炭素分圧が高くなると、頭痛、めまい、吐き気などの中毒症状が現れる。
- (3) 中毒症状として、異常な発汗、顔面紅潮、意識障害が出現することがある。
- (4) ヘルメット式潜水で二酸化炭素中毒を予防するには、十分な送気を行う。
- (5) デマンド・レギュレーター方式の潜水で二酸化炭素中毒を予防するには、ゆっくりと深く呼吸する。

問 7 酸素中毒等に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 高い圧力下で純酸素を吸入すると、脳などの中枢神経が侵され、意識を失うことがある。
- (2) 大気圧中において、長時間純酸素を吸入すると、呼吸器に炎症性変化を起こす。
- (3) 酸素中毒は、暑いとき又は寒いときなどの環境条件が悪いときに起こりやすい。
- (4) 酸素中毒は、送気中に二酸化炭素が多いときには起こりにくい。
- (5) 酸素中毒を予防するには、吸気の酸素分圧が最大潜水深度でも概ね1.5気圧を超えないようにする。

問 8 ヘルメット式潜水における減圧症に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 減圧症は、浮上後、数時間以内に発症するものが多い。
- (2) 激しい疲労感や手足の痛みなどが、重い減圧症の前ぶれであることがある。
- (3) かゆみなどの皮膚症状は、通常は手足、胸部等の一部に生じるが、ひどいときには全身に起きる。
- (4) 関節痛及び筋肉痛(いわゆるベンズ)は、人体で二酸化炭素を多く発生する肩や肘の関節部に多くみられ、ときには膝や股の関節部にも出現する。
- (5) 症状別発生率でみると、中枢神経系の障害や呼吸循環系の障害が過半数を占める。

問 9 いわゆるチョークスが進行した場合の症状として、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 浅く速い呼吸から呼吸困難になる。
- (2) かきむしるような胸苦しさが起こる。
- (3) 顔面が蒼白となる。
- (4) 脈拍が遅くなる。
- (5) 血圧が急激に低下する。

問 10 心肺蘇生法に関し、次のうち誤っているものはどれか。

- (1) 舌根が完全に気道を閉塞したときは、胸が動いていても呼吸音は聞こえない。
- (2) 水分や吐いた物、分泌物が口や咽喉の中に詰まり、気道を閉塞することがある。
- (3) 口対口呼吸吹き込み法では、5秒くらいかけて胸が十分膨らむ程度に息を吹き込む。
- (4) 人工呼吸を行うとき、事故者の口をハンカチで覆って、その上から息を吹き込んでよい。
- (5) 呼びかけに反応がなく、普段どおりの正常な呼吸の息がない場合には、直ちに心肺蘇生を行う。

(関係法令)

問 1 1 潜水業務に関し、法令上、誤っているものは次のうちどれか。

- (1) ヘルメット式潜水では、その水深の圧力下における送気量を、毎分 6 0 以上としなければならない。
- (2) 空気圧縮機によって送気を受ける潜水作業員 2 人ごとに、調節空気槽及び予備空気槽を設けなければならない。
- (3) 潜水作業員に空気圧縮機により送気する場合には、空気清浄装置を設けなければならない。
- (4) 潜水業務を行うときは、潜水作業員に純酸素を吸入させてはならない。
- (5) 緊急浮上後、潜水作業員を再圧室に入れて加圧するときは、毎分 0 . 0 8 MPa 以下の速度としなければならない。

問 1 2 特別教育に関し、法令上、誤っているものは次のうちどれか。

- (1) 潜水作業員への送気の調節を行うためのバルブ又はコックを操作する業務につかせるときは、特別教育を行わなければならない。
- (2) 再圧室を操作する業務につかせるときは、特別教育を行わなければならない。
- (3) 空気圧縮機及び空気槽の点検の業務につかせるときは、特別教育を行わなければならない。
- (4) 特別教育を行ったときは、その記録を 3 年間保存しなければならない。
- (5) 特別教育の科目の全部又は一部について十分な知識及び技能を有していると認められる者については、その科目についての特別教育を省略することができる。

問 1 3 ヘルメット式潜水作業員に空気圧縮機を用いて送気し、最高深度 3 0 m まで潜水させる場合に、法令上、最低必要な予備空気槽の内容積は、次のうちどれか。ただし、予備空気槽の空気圧力は 0 . 5 MPa とする。

- (1) 9 2
- (2) 1 1 2
- (3) 1 3 8
- (4) 1 5 6
- (5) 1 8 9

問 1 4 携行させたボンベ (非常用のものを除く。) からの給気を受けて行う潜水業務に関し、法令上、誤っているものは次のうちどれか。

- (1) 潜降直前に潜水作業員に対し、当該潜水業務に使用するボンベの現に有する給気能力を知らせる。
- (2) 救命胴衣又は浮力調整具を着用させる。
- (3) 連絡員は置かないが、潜水作業員に異常がないかどうかを監視するための者を置く。
- (4) 潜水深度が 5 m 未満の場合には、さがり綱を使用させなくてもよい。
- (5) さがり綱には、浮上停止の深度を示す位置に木札又は布等を取り付けておく。

問 1 5 高気圧作業安全衛生規則別表第 2 (潜水業務用時間表) に関し、法令上、誤っているものは次のうちどれか。

- (1) この表は、水深 1 0 m 以上の場所における潜水業務に適用される。
- (2) ガス圧減少時間について業務間と業務終了後に与えなければならない時間が示されている。
- (3) 潜水時間とは、潜水作業員が潜降を開始した時から浮上を開始する時までの時間をいう。
- (4) 潜水時間について、許容される 1 日当たりの限度と 1 回当たりの限度が示されている。
- (5) 潜水回数について、許容される 1 日当たりの限度が示されている。

問16 送気式潜水における送気量等に関する次の文中の□内のA及びBに入れる数値の組合せとして、法令上、正しいものは(1)～(5)のうちどれか。

「潜水作業者に圧力調整器を使用させる場合には、潜水作業者ごとに、その水深の圧力下において毎分□A以上の送気を行うことができる空気圧縮機を使用し、かつ、送気圧をその水深の圧力に□BMPaを加えた値以上としなければならない。」

- | | A | B |
|-----|----|-----|
| (1) | 30 | 0.7 |
| (2) | 40 | 0.7 |
| (3) | 40 | 0.6 |
| (4) | 60 | 0.6 |
| (5) | 60 | 0.5 |

問17 送気式潜水業務における連絡員に関し、法令上、誤っているものは次のうちどれか。

- (1) 連絡員を潜水作業者2人以下ごとに1人配置する。
- (2) 潜水作業者への送気の調節を行うためのバルブ又はコックを操作する業務に従事する者と連絡して、潜水作業者に必要な量の空気を送気させる。
- (3) 潜水作業者と連絡して、その者の潜降及び浮上を適正に行わせる。
- (4) 送気設備の故障その他の事故により潜水作業者に危険又は健康障害の生ずるおそれがあるときは、すみやかに潜水作業者に連絡する。
- (5) ヘルメット式潜水器を用いて行う潜水業務においては、一旦潜降させて、潜水作業者のヘルメットがかぶと台に結合されているかを確認する。

問18 空気圧縮機により送気して行う潜水業務において、特定の設備器具については一定期間ごとに1回以上点検しなければならないが、設備器具とその点検期間との組合せのうち、法令上、誤っているものは次のうちどれか。

- (1) 空気圧縮機 1週間
- (2) 送気する空気を清浄にするための装置 ... 1月
- (3) 水中時計 3月
- (4) 水深計 3月
- (5) 送気量を計るための流量計 6月

問19 潜水業務に常時従事する労働者に対して行う健康診断に関し、法令上、正しいものは次のうちどれか。

- (1) 健康診断は、雇入れの際及び1年以内ごとに1回、定期に行わなければならない。
- (2) 健康診断は、水深10m以上の場所において潜水業務に常時従事する労働者に対して実施しなければならない。
- (3) 特別の項目について、医師による健康診断を行った結果、更に、医師が必要と認めた者については、作業条件調査や心電図検査等を追加して行わなければならない。
- (4) 雇入れの際に実施した健康診断の結果は、所轄労働基準監督署長に報告しなければならない。
- (5) 健康診断の個人票は3年間保存しなければならない。

問20 再圧室に関する次のAからDについて、法令上、誤っているものの組合せは(1)～(5)のうちどれか。

- A 水深10m以上の場所で潜水業務を行うときは、再圧室を設置し、又は利用できるように措置を講ずる。
 - B 再圧室を使用するときは、再圧室の操作を行う者に、加圧及び減圧の状態その他異常の有無について常時監視させる。
 - C 出入に必要な場合を除き、主室と副室との間の扉を閉じ、副室の圧力は主室の圧力よりも低く保つ。
 - D 再圧室については、設置時及び設置後3月を超えない期間ごとに、一定の事項について点検する。
- (1) A, B
 - (2) A, C
 - (3) A, D
 - (4) B, C
 - (5) C, D